

# インド思想史学会 第19回学術大会 プログラムと発表要旨

開催日：2012年12月22日（土）

会 場：京都大学 楽友会館

京都市左京区吉田二本松町 TEL: 075-753-7603



〒606-8501

京都市左京区吉田本町 京都大学人文科学研究所気付  
インド思想史学会事務局

TEL: 075-753-6949 (藤井) / 2460 (横地)

E-mail: hit@zinbun.kyoto-u.ac.jp

http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~hit/

本状は郵便での送付に先立ってメールでも会員の皆さまにお送りしています。本状を添付したメールが届いていない会員の方には、メールアドレスが未登録ですので登録をお願いします（本文にお名前を書いたメールを事務局 hit@zinbun.kyoto-u.ac.jp にお送りくださるだけで結構です）。

# インド思想史学会 第19回(2012年度)学術大会のご案内

インド思想史学会会長 井狩彌介

インド思想史学会第19回学術大会を下記の通り開催いたします。  
皆様、どうか万障お繰り合わせの上ご参加ください。

## 記

開催日 2012年12月22日(土)

会場 京都大学 楽友会館 2階 会議・講演室

(理事会 11:30 - 12:30 京都大学 楽友会館 2階 会議室5)

参加受付 12:30 - 京都大学 楽友会館 2階 会議・講演室前

参加費：1000円 懇親会費：3000円

## 研究発表者および発表題目

13:00 - 13:45 Bill M. Mak (京都大学文学研究科・博士課程)

“The Greek transmission of astral science into India reconsidered —  
Critical remarks on the contents and the newly discovered manuscript  
of the *Yavanaajātakā*.”

13:45 - 14:30 川尻 洋平 (京都大学文学研究科・日本学術振興会特別研究員PD)

「ウトパラデーヴァとアピナヴァグプタ」

14:30 - 15:15 志田 泰盛 (京都大学白眉センター・助教)

「聴音に対する風の影響と “*anuvāta-*” の用例について」

—— 休憩 ——

15:30 - 16:15 尾園 絢一 (東北大学文学研究科・助教)

「パーニニが記述する *Desiderativ* の語幹形成について」

16:15 - 17:00 天野 恭子 (大阪大学文学研究科・元助手)

「*Maitrāyaṇī Saṃhitā* における言語層の解明を目指して」

17:00 - 17:45 西村 直子 (東北大学文学研究科・専門研究員)

「*Yajurveda* 各学派の *Saṃhitā* における「搾乳と *dadhi* 製造」*mantra* 集成  
の比較」

総会 17:45 - 18:15 (発表終了後、引き続き2階 会議・講演室で)

懇親会 18:15 - 20:00 楽友会館 1階 食堂にて

**The Greek transmission of astral science into India reconsidered -**  
Critical remarks on the contents and the newly discovered manuscript of the *Yavanajātaka*

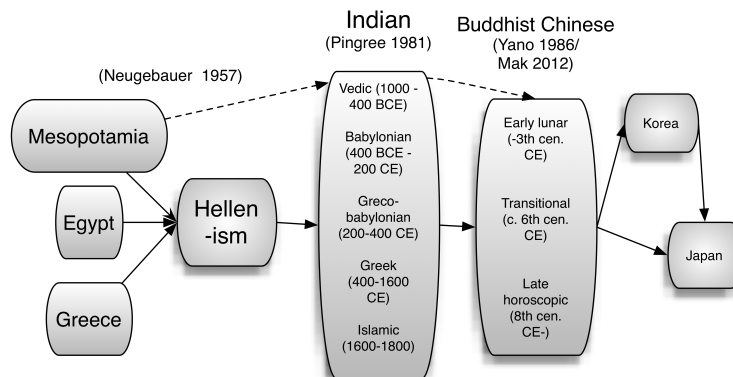
Bill M. Mak (Kyoto University)  
bill.m.mak@gmail.com

The transmission of the astral science through the Eurasian continent from Babylonia, Egypt, Greece, India and ultimately to China and Japan, is one of the major 20<sup>th</sup> century discoveries in the field of history of science and history of ideas. David Pingree, who followed the footsteps of his predecessor Otto Neugebauer, attempted to connect the Indian *jyotiṣa* materials with their Greek and Babylonian "antecedents" and thereby demonstrated the largely unilateral flow of foreign ideas into India which shaped Indian astronomy throughout the first millennium of the modern era. India was portrayed thus as a recipient and in turn, an entrepôt of foreign ideas, indianized in their outlook and subsequently disseminated to the Central Asia and the Far East via Buddhism, and to the Southeast Asia via Hinduism. According to Pingree, "the fundamental approach [of Indian *jyotiṣa*] and many of the models and parameters of each period were determined by the foreign sources" despite their unique Indian appearances. In other words, as far as the essentials of the Indian *jyotiṣa* as we know today is concerned, not much can be said to be original.

While the Babylonian and Greek influence to Indian astral science cannot be denied, encompassing fields such as cosmology, astronomy and astrology, to what extent the foreign influences shaped Indian *jyotiṣa* remains debatable. Central to Pingree's thesis of "unoriginality" is his landmark study of the *Yavanajātaka* (1978) where many remarkable Greek parallels such as the planetary weekdays and unique Babylonian elements such as various astronomical algorithms were identified. Based on his edition of the text, allegedly the earliest textual evidence of Greek transmission of astral science into India extant, Pingree dated the work to be 269/270 C.E., versified by Sphujidhva based on a prose translation (of a lost Greek text) composed by Yavaneśvara in 149/150 C.E. However, some of Pingree's claims have been dismissed by Indian scholars, most notably by K.S. Shukla (1989) who pointed out that Pingree's rather free emendations of what Pingree believed to be a highly corrupted manuscript are incorrect and unnecessary in some key instances including calendrical constants and astronomical algorithms. Pingree's claims are nevertheless largely accepted amongst Indologists.

In 2011, Michio Yano and Sho Hirose identified a hitherto unreported manuscript of *Yavanajātaka* in the archive of the Nepal-German Manuscript Preservation Project (NGMPP). Upon scrutiny, materials from the new manuscript fills up over half of the lacunae reported in Pingree's edition. More importantly, some of the new readings revealed Pingree's dating of the text based on the highly problematic *bhūtasamkhyā* to be impossible, rendering Pingree's hypothesis of 2<sup>nd</sup> century CE being the *terminus ante quem* of Greek transmission of astral science to India to be purely conjectural. A re-examination of Pingree's edition including all his emendations thus becomes a desideratum.

In this paper, I will discuss the position of the *Yavanajātaka* in the history of astral science in India in light of the new textual evidences, as well as the latest research in pre-classical sciences in India. Three topics which I will focus on are: i) The transmission of the *Yavanajātaka*; ii) The non-Greek elements and the Vedic connection as revealed by the Chinese evidences; iii) Elements of Hinduization.



## ウトパラデーヴァとアビナヴァグプタ

京都大学・日本学術振興会特別研究員 (PD) 川尻 洋平

近年、大きな進展を見せているシヴァ教研究は、Alexis Sanderson と、Dominic Goodall をはじめとするかつて同教授のもとで学んだ研究者に負うところが大きい。その一連の研究を通じてシヴァ教の歴史的展開や儀礼などの側面が明らかにされつつある。一方で、一元論的シヴァ教に哲学的理論的基盤を与えた再認識派については、Raffaele Torella、Navjivan Rastogi、Isabelle Ratie、David Lawrence などによって研究が進められている。中でも、ウトパラデーヴァ (Utpaladeva) の *Īśvarapratyabhijñakarika* とその自注 (*vṛtti*) の校訂及び翻訳研究を発表した Torella の研究成果に負うところは大きい。その成果を通じて、仏教論理学派や文法学派の強い影響が再認識派に見られることが明らかにされてきた。

しかしその一方で、再認識派自身はその内部において、創始者ソーマナダ (Somananda) から、ウトパラデーヴァ、そしてラクシュマナグプタ (Lakṣmaṇagupta) を経てアビナヴァグプタ (Abhinavagupta) に至るまで、どのような発展をしてきたのかについてはそれほど明らかではない。特にウトパラデーヴァと彼の著作に対して註釈を著したアビナヴァグプタについては、両者の思想的特徴を明らかにするのは非常に困難であり、両者の見解は再認識派の見解として同一視されがちであった。というのも、ウトパラデーヴァが、*Īśvarapratyabhijñakarika* とその自注 (*vṛtti*) をもとに、彼自身の思想を展開敷衍させたであろう *Īśvarapratyabhijñavivṛti* は、その大部分が失われているからである。このような状況の中で、Torella の *Īśvarapratyabhijñavivṛti* に関する一連の研究は、再認識派研究に新しい展開をもたらさうるものであった。

本発表では、まず、Torella によって校訂された *Īśvarapratyabhijñavivṛti* とは別に、筆者が発見した *Īśvarapratyabhijñavivṛti* の断片について報告を行う。次にウトパラデーヴァの *Īśvarapratyabhijñavivṛti* が完全な形で残る「想起能力」の箇所を焦点を当て、ウトパラデーヴァの思想をアビナヴァグプタがどのように発展させたのかを明らかにする。これによって、再認識派の神学体系の確立に果たしたウトパラデーヴァとアビナヴァグプタの役割について検討する。

## 聴音に対する風の影響と“*anuvāta-*”の用例について

志田 泰盛（京都大学 白眉センター）

聴覚器官がいかにして音を知覚するのかを説明する聴音原理をめぐり、ミーマーンサーの思想家クマーリラは *Śloka-vārttika* (*ŚV*) 後半に位置する音声 [常住性] 論題 (*śabdādāhikaraṇa*) において、ヴァイシェシカ・ジャイナ・サーンキヤなどが提唱する様々な異論を批判する。発表申請者は志田 [forthcoming] において、サーンキヤ学派が提唱する聴覚外送理論に対するクマーリラによる批判 (*ŚV śabdādāhikaraṇa* vv. 113c–121b) を分析する中で、主に文脈的な要請や、検討箇所の前後におけるクマーリラ自身による“*anuvāta-*”という語の用例などを根拠として、写本には確認されない読みの訂正 (“*nānuvātādibhiḥ*” → “*nanu vātādibhiḥ*”) を提案した。

志田 [forthcoming] では、聴音に対する風の影響というこの問題を論じるいくつかの哲学作品の他に、梵独・梵英辞典で“*anuvāta-/anuvāte*”という項目の典拠とされている *Manusmṛti* 及びそれに対する注釈文献に限った上で、この語が対格ないし於格という2つの格以外で用いられる用例は、比較的後代になってから現れているのではないかという推測も立てつつ上記の読みの訂正案を提示した。

“*anuvāta-*”という語の文法的な説明としては、例えば Apte の梵英辞典における分析的解釈のように、*prāditatpuruṣa* として実体名詞として扱うことが可能であり、また、対格形の場合は不変化複合語 (*avyayībhāvasamāsa*) としての副詞的用例とも見なしうる。これに関連して、Wackernagel は、前分が支配する複合語 (*Komposita mit regierendem Vorderglied*) について、インドの文法学派が「動詞の脱落」としてのみ説明している点を指摘している。いずれにしても、対格以外の用例についての文法的解釈としては、*prāditatpuruṣa* としての実体詞、ないしその実体詞を所有複合語としたもの、あるいは不変化複合語の特殊な例として解釈されうると考えられる。

本発表では、対象となる文献の幅を哲学文献以外にも広げ、“*anuvāte*” や “*anuvātaprativātayoḥ*” などの於格の用例とその解釈の可能性について検討し、また、この語の対格・於格以外の用例が現れる時期についても考察を加える予定である。

SHIDA, Taisei (志田 泰盛)

[forthcoming] 「古典インド哲学における聴覚の外送・内送をめぐる問題——ミーマーンサー学派によるサーンキヤ説批判——」, 多田孝文教授古稀記念論文集『東洋の慈悲と智慧』, 近日刊行予定.

## パーニニが記述する Desiderativ の語幹形成について

尾園 絢一（東北大学）

古インドアーリヤ語は、Maitrāyaṇī Saṁhitā, Kāthaka-Saṁhitā 等のヤジュルヴェーダから Śatapatha-Brāhmaṇa, Aitareya-Brāhmaṇa 等のブラーフマナ文献の時代にかけて、幾つかの形態論的变化 (morphologische Neuerung) を受ける。例えば、複合完了語幹 (periphrastisches Perfekt) や -yá- を伴う強意語幹 (Intensiv) が生産的になるのはこの時期である。パーニニ文法の動詞組織はこうした変化を受けた後の姿を示しており、パーニニの一般的規則はブラーフマナ文献の言語的特徴と一致することが多い。

意欲語幹 (Desiderativ) は、*i* 又は同化 (Assimilation) を受けた *u* で重複し、原則として、ゼロ階梯 (Nullstufe) の語根部分に *-sa-* (< idg. *\*-se/o-*, Resonant で終わる語根には *\*-h<sub>1</sub>se/o-*) をつけて作られ、主語の意欲を表す (subjektbezogen)。パーニニは意欲語幹形成接辞 *sa<sup>n</sup>* の下、数十の文法規則において、機能や形成法を定めている。意欲語幹がブラーフマナ文献より後の時代 (spätvedisch) において一層生産的なカテゴリーに発展していたことは、パーニニが形成法を詳しく記述し、それに従って多様な形が導き出されることから推定される。

本発表では、はじめに、一般的規則から導き出される、意欲語幹を一つずつ、ヴェーダの用例と照合しながら、パーニニが意図する語幹形成の原則を確定することに努める。そして形成法の原則から逸脱した形、また例えば *jighṛkṣa-* / *jigrahṣa-* / *jigrhṣa-* (<  $\sqrt{\text{grabh}}$  / *grabh*), *didhiṣa-* / *dhitsa-* (<  $\sqrt{\text{dhā}}$ ) のように一つの動詞に対して異なる語幹が見いだされる事例を、Heenen, *Le desideratif en védique* (2006) などの網羅的研究をも利用しながら、ヴェーダ文献から網羅し、パーニニが規則を立てる上で念頭に置いていた (又は置いていなかった) 事実を明らかにする。ブラーフマナ期以降、意欲語幹から作られる使役語幹や複合完了語幹などの用例が増加するが、そうした事情をも考慮に入れながら、パーニニが教える意欲語幹がどのヴェーダ文献の言語的特徴に近いかということ考察する。

またパーニニが III 1,5-6 に挙げる、*gup*, *tij* などの幾つかの動詞語基 (*dhātu*) は (常に) 意欲語幹を現在語幹とすることが規定されている。列挙される動詞の中には、意欲語幹の用例が見いだされないものもあるが、これらの動詞から作られる意欲語幹はパーニニの時代には語彙化し、特別な意味を示していたと考えられる。そこで III 1,5-6 に挙げられる動詞の意欲語幹を主にヴェーダから網羅し、意欲語幹として機能している用例と語彙化した用例とを可能な限り区別しながら、意欲語幹が語彙化する過程を明らかにすることを旨とする。

黒 Yajurveda に属する Maitrāyaṇī Saṁhitā (MS) は、祭式に用いるマントラ集とヴェーダ散文と称される祭式説明の記述から成る。一般的に、マントラ集は BC 900 年より前、散文部分は BC 900 年以降の成立とされている<sup>1</sup>。

確かにマントラの言語は、言語的に古風であり、散文とは違う言語層に属しているといえる<sup>2</sup>。しかしながら、MS はマントラ集と散文部分というそれぞれ纏まった二つの部分が合わさっているのではなく、両者が交互に入り混じって構成されており、MS が祭式のガイドブックとして編纂されていく過程において、祭式ごとにマントラと散文を一組に編集し、必要があればそこにさらなるマントラや散文を付け加える形で、何段階かの編集過程を経て、現存する文献の姿になったと考えるのが妥当である。また、MS の全体は 4 巻から成っており、4 巻は Kilakāṇḍa 「補遺の巻」と記され<sup>3</sup>、新しい成立であることが一般に認知されているが、1-3 巻の成立については何も知られておらず考察もされていない。しかしながら、この 1-3 巻全体が同時期に編纂されたと考える証拠もない。

筆者は *Die Maitrāyaṇī Saṁhitā* (2009) において、MS の 1,2 巻における散文部分を全訳した。1 巻においては 8 つの章が、2 巻においては 5 つの章が散文を含む。翻訳の過程で、この一つ一つの章がそれぞれ固有の特徴を持つことを認識した。その一つはいわば「言葉遣い」の違いである。ある章においてある言語現象、言い回しが頻出する、またある章には見られない、といったことが、明確に認識できる。また、一つの章を構成する、構成のし方にもそれぞれの特徴がある。さらに、Kāṭhaka-Saṁhitā (KS) と Taittirīya-Saṁhitā (TS) という、近い関係にある他学派のテキストの記述と比較した時、関係の緊密さも章によって相違があることがわかる。

このような判断基準をもとに考察すると、MS 内部にいくつもある言語層が浮かび上がることが、研究の積み重ねからわかってきた。AMANO, "Indication of Divergent Ritual Opinions in the Maitrāyaṇī Saṁhitā"<sup>4</sup>, §4 において、祭式議論の際のいくつかの表現の分布を提示し、MS の各章それぞれの特徴を示したが、これは MS 内部の言語層を明示する一つの試みであった。

今回の発表ではまず、このような研究の方法論を確立することを目的としている。一つの文献の中の言語層を、どのようにして浮かび上がらせるのか、どのように示すことができるのか、「言語層マップ」と仮に呼ぶ、可視データ化の試みを提示したい。また、それによって浮かび上がった言語層は、単純に時間軸のみに位置付けられるものではない。データをどのように評価するのか、その評価の方法を問いたいと考えている。

<sup>1</sup> Michael WITZEL, "Tracing the Vedic Dialects" (1989), 250.

<sup>2</sup> WITZEL (1989), 124; Witzel, "The Development of the Vedic Canon and its Schools" (1997), 266ff.

<sup>3</sup> Leopold VON SCHROEDER, *Maitrāyaṇī Saṁhitā*, viertes Buch (1886).

<sup>4</sup> Proceeding of 5<sup>th</sup> International Vedic Workshop, 2011 Bucharest (印刷中)。

## Yajurveda 各学派の Saṁhitā における「搾乳と dadhi 製造」mantra 集成の比較

西村 直子 (東北大学大学院文学研究科 専門研究員)

Yajurveda-Saṁhitā は、新月祭・満月祭を基本形とする *iṣṭi* (穀物祭) において唱えられる mantra 集成を冒頭に置いている。その中の「搾乳と dadhi 製造」章は、主に本祭前日の晩(*upavasatha*) に唱えるべきものとして伝承されてきた。*Śrauta* 祭式の整備が進んだ *Śrautasūtra* 段階では、*sāmnāyā* (*upavasatha* の晩に搾乳、準備した *dadhi* と、翌朝に搾乳、加熱した *śrta* とを献供直前に混ぜ合わせた供物) を捧げる特別な新月祭の場合に適用されるものと位置づけられている。しかしながら、mantra 集には *sāmnāyā-* の語はそもそも現れず、*brāhmaṇa* の段階では、*sāmnāyā* を特別な新月祭の供物とする見解は、各学派の間で完全には共有されていなかった可能性が高い。*sāmnāyā* を明確に特別視する祭式システムが構築されてきた過程は解明されておらず、*Śrauta* 祭式の整備過程や Yajurveda 学派の展開、文献成立史とも密接に関わる重要問題である。それらの解明には、既に整備を経た *Śrautasūtra* の伝承に先立つ、最古の mantra 集とその *brāhmaṇa* との精査が明らかに有効である。

以上の視点に基づき、本発表では「搾乳と dadhi 製造」mantra 集成について、構成と個々の mantra の内容との両面から各学派の伝承を比較検討する。「構成」というのは、各学派に共通する mantra を基準として「同じ位置」と見なし、その前後に配置された mantra の位置関係を吟味するものである。「内容」というのは、語彙、語形、構文等の点から異同を吟味するものである。学派間の類似性を評価する際には、mantra 集の構成と mantra の内容との点から、試験的な数値化を行う。これは、今回各学派の共通点の多寡を差別化する為に便宜上設けた補助的な試みである。また、この調査を経て示された数値的な結果は、今回扱う「搾乳と dadhi 製造」以外の章についても同様の試験的評価を行い、今回の結果と併せて更に論ずべき性質のものである。

Yajurveda 学派は、文献編集の形式という点から、mantra 集と *brāhmaṇa* とを一括して Saṁhitā に収める黒 Yajurveda 学派 (*Maitrāyaṇīya* 派, *Kaṭha* 派, *Taittirīya* 派) と、*brāhmaṇa* を独立した *Brāhmaṇa* 文献として編集する白 Yajurveda 学派 (*Vājasaneyin* 派) とに分けられる。各文献の伝承内容についても、黒 Yajurveda 学派内部の差異は小さく、白 Yajurveda には明らかな独自性を見出し得ることが予測される。しかしながら、本 mantra 集の精査から、*Maitrāyaṇī Saṁhitā* の独自性が高く、*Kaṭha-Saṁhitā* – *Taittirīya-Saṁhitā* – *Vājasaneyi-Saṁhitā* の3者が類似性を持つ緩やかなまとまりを形成していた可能性が指摘される。